友だちどうし

小川未明

青空文庫

乳色の冬の空から、まぶしいほど、日の光は大地へ流れていました。風のない静かな日で雪のない国には、やがて、春が間近へやってくるように感ぜられるのでありました。

年ちゃんは、紅茶の空きかんの中へ、ガラスのおはじきを入れていましたし、正ちゃんは、ほうじ茶の紙の空き袋の中へ、ガラスのおはじきも入れていれば、また、秋の暮れにお宮の大きな木の下で拾った、銀杏の実も入れていました。

毎朝、洗い清められる玄関の外のアスファルトの上に、二人はしやがみながら、たがいにおはじきを出して見せ合ったり、取りっこをしたりして、遊んでいました。年ちゃんの持っている、青い色のおはじきは、町へお母さんといっしょにお使いにいって買ってもらったもので、眼鏡のようにして、すかして見ると、空も、家も、木も、うす青く、遠く、遠く、なって見えるので、年ちゃんは魔法の眼鏡と自分で呼んでいる、大事な、そして、好きなおはじきでありました。また、正ちゃんの銀杏の実は、自分が木から落ちたのを拾って、いいのだけを択んだもので、たとえおはじきを五個でも、一粒の銀杏の実とは換えがたい貴いものでありました。二人は楽しそうに、自分のものを出したり、入れたりして、自慢しあって、仲よく笑っていたのです。

そこへ、見知らぬ、一人の少年がやってきました。

「なにしているの?」と、さもなつかしそうに、少年は、いい寄りました。

「おはじきをしているのだよ。」と、年ちゃんが、少年を見ました。

「僕も、仲間に入れてくれない?」と、少年は、頭を傾けて、二人の顔を見たのであります。

いかにもその少年は、弱々しそうであり、さびしそうでもありましたから、「ああ、お入りよ。」と、正ちゃんがいいました。

少年は、喜んで、二人と並んで、アスファルトの上へしゃがみました。

このとき、年ちゃんが、「君の家は、どこだい?」と、少年に、ききました。

なぜか、少年は、恥ずかしそうにして、だまっていました。

「町の方?」と、正ちゃんが、いいました。少年は、だまって、ただうなずきました。

「僕に、おはじき三個ばかり、貸してくれない?」と、少年は、正ちゃんの顔を見ました。

「君、おはじき持っていないのかい。」と、正ちゃんは、少年にいって、年ちゃんと相談するように顔を見合わせました。

「どうしたら、いいだろう?」と、心に思ったからです。断るのも、なんだか意地悪に感ぜられるし、また、これまで話したこともない、少年が、おはじきを持たずに、仲間へ入れてくれというのも、ずるいような、まちがっているような、気がしたからです。しかし、おはじきの上手な年ちゃんは、自信を持っていました。

「いいから、貸しておやりよ。正ちゃんが二個、僕が二個、貸してやろうよ。」と、年ちゃんが、いいました。

「貸してくれる? ありがとう。」と、弱々しい、青い顔の少年は、急に目を輝かして、お礼をいいました。

「だが、君が、負ければ、もう貸してやらないから。」と、年ちゃ

んが、念を押しました。

「いいよ、僕が、負ければ、もう貸してくれといわない。そして、今度きたときに借りたのは返すからね。」と、少年は、答えたのです。

「いいから、しようよ！」と、正ちゃんは、元気でありました。

三人は、輪になって、おはじきをはじめました。しかし、その少年は、恐ろしく感じたほど、おはじきがうまかったのです。年ちゃんと正ちゃんが、いくら戦ってもさんざんに負かされてしまいました。最後に年ちゃんの大事にしておいた、青いおはじきも、また、正ちゃんの持っていた銀杏の実も、すっかり少年に取られてしまって、少年は、ただ借りた四個だけをアスファルトの上へ残して、あとのさらった分をポケットに入れると、

「さようなら。」といって、さっさといってしまいました。

年ちゃんと、正ちゃんの二人は、ものもいえずに、泣き出しそうな顔つきをして、少年の後ろ姿をうらめしそうに、見送っているばかりでありました。

＊　＊　＊　＊

少年の姿が、見えなくなった時分、あちらから英ちゃんが、ボールを空へ投り上げながらきました。そして、年ちゃんと正ちゃんが、元気なく、ぼんやりとしているのを見て、

「どうしたの？」と、英ちゃんは、ききました。二人は、少年の話をしました。すると、

「どっちへいった？　卑怯のやつだ！　僕が、取り返してきてあげるよ。」といって、英ちゃんは、駆け出しました。

町の方へつづく道には、人影が、ちらほらと見え、チンドン屋の音などがして、にぎやかそうでした。

「英ちゃんは、強いから、けんかをしたって、負けはしないね。」と、正ちゃんが、心配しながら、いいました。

「僕だって、あんな奴、やっつけられるんだよ。」と、年ちゃんはいって、なぜもっと早く、この勇気が出なかったものかと後悔しました。

二人は、英ちゃんの後を追って、町の方へ駆け出したのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　11」講談社
　　1977（昭和52）年9月10日第1刷発行
　　1983（昭和58）年1月19日第5刷発行
底本の親本：「小学文学童話」竹村書房
　　1937（昭和12）年5月
初出：「児童文学」
　　1937（昭和12）年1月
※表題は底本では、「友《とも》だちどうし」となっています。
※初出時の表題は「友達同志」です。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：酒井裕二
2016年12月9日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

友だちどうし

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/